

書評

『写真の物語 — イメージ・メイキングの400年史』

著者：打林 俊

発行：森話社 2019年7月初版

本書は写真史の本である。大変有益でユニークな内容なので、ご紹介する。副題「イメージ・メイキングの400年史」は、1550年頃にカメラ・オブスクラに凸レンズが装着されることで描画器としての機能が高まった時点から1940年頃までを対象としていることを表している。1839年のダゲレオタイプ（銀板写真）の発表に先立つ300年近く前から記述を始めていることはあまり前例が無く、本書ではこれまでの写真史の本では実現困難な課題を見事にこなしている。写真の作品作り・表現手法と写真の社会的な存在・意義を対象とした写真史の本には優れた著作が存在するが、これに写真の「技術」の歴史を織り交ぜて適切なまとめを実現している本はあまり見つけることができない。日本大学芸術学部の非常勤講師である著者は、平易で読みやすい文章で、写真の技術に関する記述もイメージ・メイキングについての記述とバランスをとり筆者は筆を進める。写真から分かる様に厚さ40mm、480ページを超える大著だが、文字が大きく、行間が広くとってあることもありどんどん読み進めることができる。適切に内容を取りまとめることは手に余るので、コラムのタイトルを含め本誌の目次を転載し、要約に替える。



主要目次： プロローグ 写真史を学ぶ意義—写真について考えてみる [I] 第1章 焦点を結ぶ欲望 第2章 目隠しの接戦—写真の発明まで 第3章 視覚革命—初期写真と社会のかかわり 第4章 初期写真の技法史 第5章 表現の広がり—ウェット・コロジオン・プロセスによる記録とドライ・プレートの登場 column 錬金術と空想科学から見る写真 [II] 第6章 芸術の息吹—写真と美術の最初の接触 第7章 「写真らしさ」と芸術—ピーター・ヘンリー・エマーソンとピクトリアリズムの成立 第8章 ピクトリアリズムの展開—1890年代から1920年代 第9章 さまざまな印画技法と小型カメラの登場 column 写真としての美術—絵画複製写真の世界 [III] 第10章 モダニズム写真へ—鮮明なイメージへの回帰 第11章 出版文化から見るアメリカのモダニズム写真 第12章 カラー写真小史 column ヴァナキュラー写真の分界—家族写真をめぐって エピローグ。

私はまず、第2章のニエプスとダゲールが登場する写真感光材料の研究を巡るエピソードに魅了された。このテーマを扱っている文章は多いのだが、本書はこれまで出会ったどの文章よりも読み進む心を捉える。本書の優れた点は取上げきれないので、一つだけ気付いた注意事項をあげる。

日本写真学会の会員の方は、本書を読み、自分が勉強した内容とは違うという印象の点が見つかる事と思われる。たとえばカラー写真技術では、ニュートンの「光学」から、被写体の各部分からの分光エネルギー分布を再現するのが確かな色再現技術で「物理カラー」と呼ばれることを学ばれた方が多いと思われる。R,G,Bの3原色で色分解し、合成する方法に比較し、個人の色覚の違い、動物や昆虫に至るまで元の色（色光）を再現する上で視覚の特性の違いの影響を受けない。一見本書では分光的なカラープロセスについて記述が無い印象を受けるが、リップマンプロセスの言葉だけは登場する。また1861年のマクスウェルによる3色分解・合成の実験が、赤色に感度を持たない感光材料を用い、紫外域での撮影により成立したというエピソードは大変インパクトが強い内容であるが、この点についても記述は無い。

この類の部分はいくつかあるが、これは本書の欠点でも著者の責任でもない。いわば「想定済み」の事柄であるが、特定の技術に詳細な知識をお持ちの方は留意して読み進められると良い。想定済みの事柄として「あとがき」を引用する。

あとがき：「なぜ、写真史や美術史の本が世の中にいくつも必要なのだろうか。当然、日々世界中で研究が進展し、新たな事実がわかってくるから、というのが理由としてまずある。しかし、それ以上に大切なのは、生まれ育った国や受けた教育によって歴史家たちそれぞれのバックグラウンドが異なり、どこに重点をおくかがおのずと異なってくるという点にある。こうした蓄積が、歴史記述の多様性と厚みを増していく。」【以下略】

写真技術が、デジタル化以後も大きく変化しつつある現代、本書は初学者から年齢の高い方にまでぜひ通読していただきたい一冊である。

桑山哲郎